

【音の状況を発見するために その2：アルヴィン・ルシエによる自発的音楽作品を中心に】

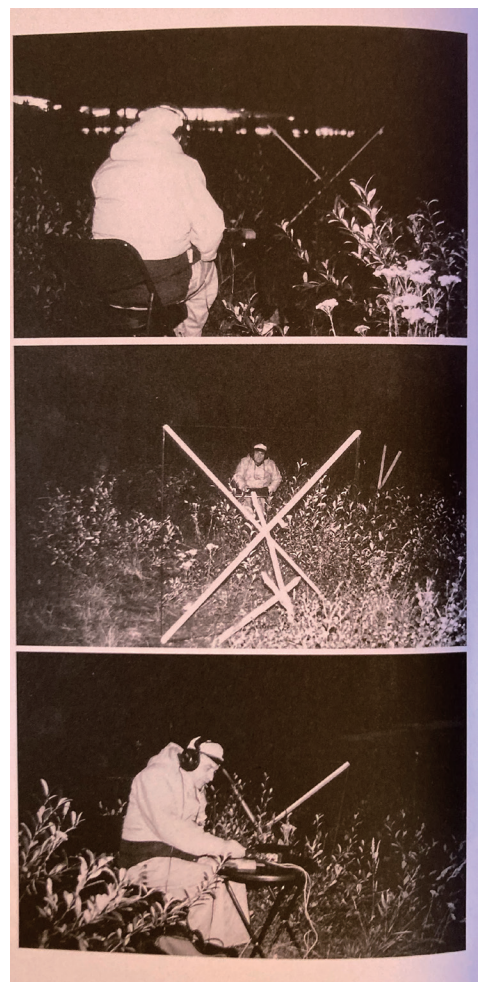
アメリカの作曲家アルヴィン・ルシエ（1931-2021）による作曲作品を「音の状況
を発見するために」と題して紹介する講演会の第2弾。

今回は自発的音楽作品ということで、演奏者を介することなく自動的に演奏される
作品、つまり装置を設置することで自然の音の状況が現れてくるサウンド・インスタ
レーション作品を2つ取り上げて紹介しました。

また今回のタイトルに自発的 =spontaneous という言葉を使ってみました。それが
最適な言葉であるかどうかは分かりません。自動的 =automatic と呼んでも良いのか
もしれませんが、自動といっても無意識に由来するオートマティズム =automatism
の話ではないですし、人の手によってプログラムされた音楽を自動演奏する作品でも
ないので、自然由来の自発的と名付けてみました。

最初に紹介した作品は「Sferics」。

電離層の音を聴くという作品「Sferics」は、1981年8月27日にコロラド州のチャー
チパークにて手作りのループアンテナを設置し記録した音源が1988年リリースのLP
として発表されています。



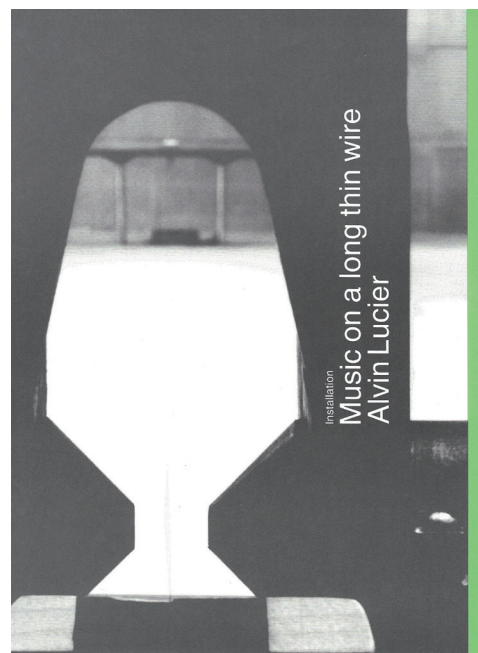
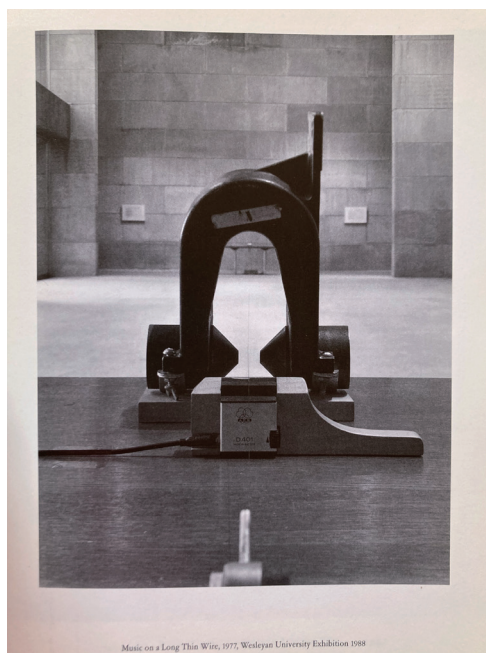
Sferics とは「大気圏の」という形容詞や「空電」という現象の名詞である atmospheric の略語です。空電とは近くあるいは遠くの雷から放射される電磁エネルギーによって、電離層にて自然のラジオ周波数が放たれる自然の現象です。これらの信号は人間の可聴域で生じ、アンテナと増幅によって拾い上げることが可能なもので、電信技術や電波放送技術の発達により 20 世紀になって発見された現象です。

空電の中でも電波の低周波成分が低い電離層を突き抜けて高い電離層の領域内を伝搬し、地球の磁力線に捉えられて遠い距離まで（地球の反対側まで）届く、周波数が下降する音となって聞こえる Whistler という現象があります。ルシエ氏は 1967 年からそれを捉えようとする 構想を既に抱いておりました。

講演では 1967 年の構想以来どのようにして「Sferics」へと到達したのかについて、深掘りしてお話ししました。



二つ目に紹介した作品は「**Music on a long thin wire**」です。



1977年に作曲され、現在ではサウンド・インスタレーションと言われる分野の代表的な作品の一つとして取り上げられることが多い作品です。日本でも1989年京都のスタジオや1992年川崎市市民ミュージアムにて展示されました。

当初「Music on a long thin wire」はパフォーマンス作品として考えていたようです。公式の譜面にはパフォーマンスのやり方が指示されています。文献研究により、その時点では電磁誘導と弦の2次元運動の視聴覚化を目指していたことが分かりました。パフォーマンスを繰り返していくうちに、弦自身が持つ自然の安定 [plateau] があることにルシエ氏自身が気づいていきます。その自然の安定は「ワイヤーの疲労、気流、暖まりや冷えにより、さらには人間の接近」によって変化が生じます。つまり「発振器の慎重なチューニングによって、ワイヤーが単独で鳴るところがある」ことに気づくのです。そうやって音楽的な処理を手放すようになり、ついにはパフォーマンス作品からサウンド・インスタレーション作品へと至ったものです。

今回紹介した「Sferics」や「Music on a long thin wire」はどちらもルシエ氏のオリジナルのアイデアでもなければ、素材を配置して構成するような種類の作品ではありません。すでに知られていた自然現象を取り上げて、その音を明瞭にするためのいくつかの操作を実験したのちに「自然の音を変えてしまうというアイデアに不満があり」、そういった操作的な行為を手放すようになります。このことから、まさに自然現象に関して既にあるアイデアに関心に向け、現実の状況の中でそれを見出すような、より純粋な自然の状況に視点が向いていったことが彼の作品研究をしていくと良く分かります。自然の現象を観察出来るようにすることと、そこでの体験が彼の芸術作品言えるのではないのでしょうか。

Music on a Long Thin Wire

Notes:

I DREAMED THAT PYTHAGORAS' MONOCHORD STRETCHED
FROM THE EARTH TO THE MOON. I KNEW IT WOULD SOUND
AMAZING.

Main piece

「長くて細い針金の音楽」のためのノート

私は地球から月までも続くビュタガラスのモノコルドを想像しました。それはきっと驚くべき音がするだろうと思いました。(アルヴィン・ルシエ)